1945年７月30日の加古川爆弾投下

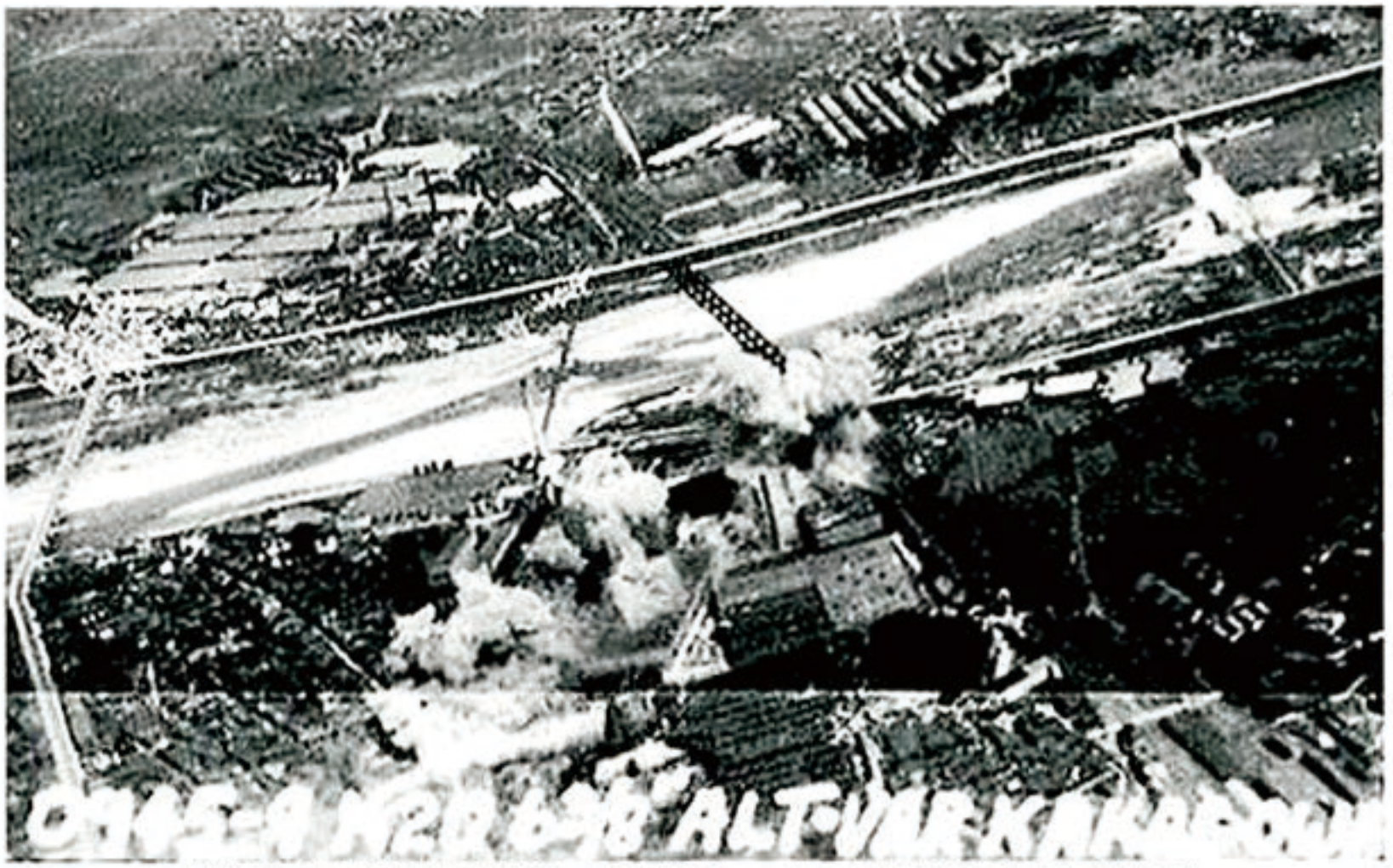
米軍記録資料を発見

空爆当時のニッケ加古川工場周辺の様子

太平洋戦争末期の1945年７月30日、米軍艦載機が加古川市加古川町に爆弾を投下した際の米軍の記録資料が残っていたことが分かった。大分県宇佐市教育委員会に勤める戦史研究家の織田祐輔さん(29)＝姫路市出身＝が発見。地元では死傷者が数名出たと伝わっており、同日には加古川飛行場も襲撃されていた。30日に加古川市内であった「兵庫フェスタ」で初公開した。（安藤文暁）

織田さんが3年前に東京・国立国会図書館で見つけた。資料では都市名が「KAKAGOWA（かかごわ）」となっており、午前9時45分に米軍艦載機が100㌔爆弾12発を日本毛織（ニッケ）加古川工場群に投下し、8、9発が命中したと記録される。

「米軍部隊が鶉野飛行場（加西市）を攻撃する際、機体の不具合で投下できなかった機が帰りに落とした、とある。ニッケを軍需工場とみていた」と織田さんは説明する。



爆弾投下や機銃掃射の攻撃で、煙をあげるニッケ加古川工場群。その上が加古川

戦史研究家の織田さん ニッケ工場群に12発

資料は同日、別部隊が加古川飛行場にも6発のロケット弾を放ち、すべて格納庫に命中したとも記す。だが既に飛行場は再三の攻撃で損傷が激しかったためか、損害は評価されていないという。

今回、「加古川飛行場を保存する会」代表で戦史研究家の上谷昭夫さん(76)＝高砂市＝の呼び掛けに応じた織田さん。フェスタの一環で加古川市民会館に設けられた「戦後70年平和展示会」で披露し、「米軍資料を用いた県内の空襲被害調査は爆撃機B29の空襲被害が中心。ただ、小型機による空爆被害も多く、十分な調査が必要だ」と語った。

当時、高砂市で国民学校1年生だった上谷さんは「自宅でカミナリのような機銃掃射音を聞いた。低空飛行のせいか、高砂女学校(現高砂高校）近くの変電所の電線がことごとく切れていた」と回想。「米軍資料の発見は当時を知る貴重な功績だ」と話した。

ほかにも加古川市内での空爆は45年7月23、24日、28日、8月2日にもあったと伝わる。

米軍資料を見つけた織田さん（右）と加古川飛行場で使われていた97式戦闘機の模型（左）